

## 「レオナルドの眼と人類の議会」

ポローニャ大学での講演

尊敬するロベルシ＝モナコ総長からの寛大なご紹介に感謝申し上げます。また「ドクター・リング」の榮譽に対し、心から御礼を申し上げます。総長はじめポローニャ大学の諸先生方、並びにご来賓の皆さま。そして、敬愛する学生の皆さま。本日、世界最古の歴史と伝統を誇る、ここポローニャ大学で講演の機会を与えられましたことは、私の最大の光栄とするところであります。

総長はじめ、ご関係者の方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。グラッチェ(ありがとうございました)。

試験期間の一番お忙しいときにもかかわらず、このように、お集まりいただき、厚く感謝申し上げます。この講演会に出席した学生の方には、特別に、優秀な成績をつけていただくよう、私は、総長に、教授の先生方に、謹んで、お願いするものであります。

本日は、国連に関連して、少々、論じさせていただき運びとなりました。

私は、国連にまつわるグローバルな課題を考えるのに、このポローニャほど格好な天地はなかろうとの感慨をもつ一人であります。五年前に東京で、総長、副総長と会談した際にも申し上げたことですが、主権国家の枠組みを超え、国連にグローバルな地平をもたらしていくには、貴大学の900年の伝統に脈打っている「普遍性」「国際性」の気風こそ、まことに貴重な財産であると思うからであります。

既に13、4世紀、貴大学には、その名声を慕って、ヨーロッパ全土から学生が集まり、自治の気風も高らかに国際的な大学都市を形成していたといわれます。

その意気軒昂たる様子は、神聖ローマ皇帝(フリードリヒ2世)の横暴に対し、学生たちが、「われらは一陣の風に屈してしなう湖沼の葦にあらず。ここに来たらば、そのわれらを見いださん」(ガイド・ザッカニーニ『中世イタリアの大学生生活』児玉善仁訳、平凡社)と、一步も退かなかつた、とのエピソードに、よく見てとることができるのであります。

昔も今も、こうした気概こそ、世界市民のバックボーンであるからであります。

私どもSGI(創価学会インタナショナル)も、国連NGO(非政府組織)の一員として、様々な支援活動を行ってまいりました。

1982年以降、世界数十都市で、「核兵器——現代世界の脅威展」「戦争と平和展」「環境と開発展」などを国連と共催し、地球的問題群の打開に向け、英知の結集を呼びかけてまいりました。更に、人間の尊厳を訴え、「現代世界の人権展」



を、昨年(1993年)12月には、「世界人権宣言」の45周年を記念して、また、本年2月には、国連・人権委員会の会期に合わせ、ジュネーブの国連・欧州本部で開催しております。一昨日まで、ロンドンでも開催しておりました。

21世紀を担う青少年のため、婦人平和委員会が実施した「子どもの人権展」「世界の子供とユニセフ展」なども、ユニークな試みとして、高く評価されてまいりました。また、青年を中心に、数々の難民救援募金、カンボジアへの約30万台に及ぶラジオ支援にも、力を入れてまいりました。

私自身も、3度にわたる国連・軍縮特別総会をはじめ、折々の記念提言の中で、平和と軍縮、国連の改革のための試案を幾多、世に問うてきております。とはいえ、SGIは、政治団体ではなく、単なる社会団体でもありません。あくまで人間の内面の改革を促す仏教運動を基調としております。

### 国連の活性化へ「精神の基盤」を

ゆえに、本日は、国連改革の具体的側面というよりも、この「人類の議会」を活性化していくための精神的基盤、その担い手たる世界市民のエートス(道徳的気風)といった、理念的側面を考察させていただきたいのであります。

なかんずく、貴国の偉大なる文化への敬意と感謝の思いを込めて、イタリア・ルネサンスの生んだ「万能の天才」レオナルド・ダ・ヴィンチにスポット・ライトを当てながら、「自己を統御する意志」と「間断なき飛翔」の2点に論及させていただきたいと思っております。なぜなら、国連というグローバルなシステムの本質は、あくまで、協調と対話を機軸とするソフト・パワーという点にあり、そのパワーを強化していくには、迂遠のようでも精神面、理念面での裏打ちが不可欠だからであります。

近くは、ボスニア情勢に見られるように、ぎりぎりハード・パワーの選択の局面があったとしても、国連の第一義的使命が、どこまでもソフト・パワーにあることは異論の余地

がありません。

明年、創設50周年を迎える国連の歴史は、短いといえは短い。長い人類の歴史から見れば、緒についたばかりともいえます。しかし、あまりにも短命に終わった、あの国際連盟の悲運を考えれば、国連の半世紀の歩みは、決して軽視されてはならない。

とりわけ、米ソ冷戦の終結とともに、PKOなど国連の動きは、見違えるように活発化し、ようやく、創設時の精神が機能しはじめた、といわれる昨今、この流れを、何としても希望の21世紀へと繋いでいかねばならないからであります。

半世紀前の国連創設の立役者は、いうまでもなくアメリカのルーズベルト大統領であります。

彼は、同じく国際連盟の旗振り役であったウィルソン大統領の志を継ぎ、理想主義、国際主義、人道主義を掲げました。

その信念が、国連創設の精神となり、原動力となったことは周知の史実であります。

スターリンやチャーチルなどの強者を相手に、倦まず、普遍的安全保障の理想を説き続ける、その姿を、ある後世の史家は、なかば揶揄を込めて、「宇宙的ヒューマニズム」と呼んだそうであります。

確かに、その後の冷戦下での国連機能の形骸化を見れば、揶揄されても仕方のない面があったかもしれません。しかし、歳月の淘汰作用には、まことに測れないものがあります。

今、創設時の精神への回帰と復興がいわれるなか、「宇宙的ヒューマニズム」は、決して、絵空事でも夢想でもなくなりつつあるのであります。

あれこれと思い巡らせているとき、ちょうど、レンズを調整しているとカメラのファインダーに被写体の輪郭が明らかになってくるように、私の脳裏に鮮明に、動かしがたく浮かび上がってくるのが、巨人レオナルド・ダ・ヴィンチの高くそびえ立つ姿なのであります。「善悪の彼岸」を悠々と独歩していたかのようなレオナルド・ダ・ヴィンチと、生々しい利害・打算の渦巻く、あまりに散文的な国連とは、次元が違いすぎて、両者を結びつけるのは唐突のように思えるかもしれません。しかし、我々は万事に、短いスパン(間隔)と長いスパンの視野を併せもたなくてはならないと思えます。

巨視的に見れば、ヤスパースが、「リオナルドとミケランジェロは二つの世界である。この二つの世界はお互に近づき合おうとはしない。リオナルドはコスモポリタン(世界市民)であり、ミケランジェロは愛国者である」(『リオナルド・ダ・ヴィンチ——哲学者としてのリオナルド』藤田赤二訳、理想社)と評したレオナルド的視野が、今ほど要請される時はないと、私は思うのであります。

## 変革にはまず「人間」の確立から

さて、我々がレオナルドに学び、継承していくべき第一の点は、「自己を統御する意志」ということではないでしょうか。

レオナルドは独立不羈の自由人であり、宗教や倫理の規範から自由であるのみならず、祖国、家庭、友人、知人といった人間社会のしがらみにも束縛されぬ、孤高の世界市民でありました。

ご存じのとおり、彼は庶子であり、独身を貫いたその生涯から、家族の痕跡を見いだすことは稀で、祖国フィレンツェ共和国への愛着もまた、はなはだ希薄でありました。

祖国での修業時代を終えると、躊躇なくミラノへ赴き、君主イル・モーロのもとで十数年を過ごす。君主の没落後は、短期間、チェザレ・ボルジアと組んだあと、フィレンツェ、ローマ、ミラノと居を移しながら我が道を歩み続け、晩年はフランス王の招きに応じ、かの地で生涯を終えています。彼は、決して冷淡な人間ではなく、徳性に欠けるわけでもなかったが、その一生は、ともかく己の欲するところに、ひたすら忠実な“超俗”の風格に貫かれております。

いかなる挙措や出処進退にあたって、レオナルドは、祖国愛や敵味方、善悪、美醜、利害などの世俗的規範には、ほとんど関心を示さず、それらを超出した境地を志向し続けている。名誉や金銭をもつての誘いなど、どこ吹く風とし、さりとして権力の意向にあえて逆らおうともせず、己が関心事のみを追い続けるその歩みは、二君に仕えずといった世俗的倫理とはおよそ無関係でありました。

“謎の微笑”を浮かべる優美な女性像「モナ・リザ」の作者は、同時に、鬼神もひしぐ猛々しい戦士たちがせめぎ合う「アングリアの戦い」の作者でもありました。

流水の模様にも目を凝らし、植物の生態を見つめ、鳥の飛翔を分析するレオナルドは、同時に死刑囚の顔を食い入るように凝視し、解剖のメスを振るうレオナルドでもあったのであります。

ともかく、世間の常識や規則では、推し量ることのできぬ巨大なスケールの持ち主でありました。そして、世俗的規範を超出しゆくその自在さは、まさに自由人にして世界市民の精髓をのぞかせており、イタリア・ルネサンスならではの伸びやかで活気に満ちた時代精神を、独自の風格に体現しております。

その超出を可能ならしめたものこそ、類まれな「自己を統御する意志」であったのではないかと、私は思うのであります。

「自分自身を支配する力より大きな支配力も小さな支配力もちえない」(『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』杉浦明平訳、岩波文庫)と述べているように、彼にとっては、どう自己を統御するかが万事に先立つ第一義的課題であり、その力が十全に働いていさえすれば、いかなる現実にも自在な対応が可能であり、現実次元の向背、善悪、美醜などは、二義的、三義的な価値しかもたない。

彼は、かつての主君イル・モーロを滅ぼしたフランス王の招きにも平然と応じていますが、傍目には、それが志操一貫に欠けるように見えても、この巨人に関しては、無節操とは似て非なる、寛大な度量の大きさを物語っているようであります。

こうしたレオナルドの“超俗”のかたちは、仏法で説く「出世間」の意義に親近しております。

## 世間に左右されぬ「自由」の境地

「世間」とは差別(違い)を意味する。「出世間」とは、すなわち利害や愛憎、美醜や善悪などの差別を超出して、それらへの執着から離れる意義であります。

仏教の最高峰といわれる法華経では、「令離諸著(諸の執着から離れさせる)」等と記されております。とはいっても、仏典の極理に、「離の字をば明とよむなり」とあるように、単に煩惱への執着を離れるのではなく、超出したより高い次元から諸の煩惱を明らかに見て、使いこなしていく、強い主体の確立こそが、「出世間」の真義であります。

ニーチェのような"善悪の彼岸"の住人が、「レオナルドは東洋を知っている」と喝破しているのも、こうした"超俗"のかたちへの親近と無関係ではないと思われまゝ。その親近は、仏教にあっても、レオナルドにあっても、"超俗"及び「出世間」の心が、しばしば鏡に譬えられている点からも察することができます。

この「自己を統御する意志」ということで、ロシアの文学者メレシコフスキーのレオナルド伝に、私の忘れ得ぬ一幕があります。

この評伝は、作者の想像力による創作部分も多いようですが、主君イル・モーロ軍がフランス軍に滅ぼされる戦闘の様子を、レオナルドが愛弟子とともに丘の上から眺めているこの部分は、いかにもレオナルドらしい面目を躍如とさせており、迫真力をもって迫ってまいります。

「彼らはもう一度、砲火を交えている遠い煙の塊を眺めた。今その煙は無限の平野の末に、おそろしく小さいものに見えた」(『レオナルド・ダ・ヴィンチ——神々の復活』米川正夫訳、河出書房新社)

「祖国、外交、名誉、戦争、国の興亡、国民の叛乱——人間にとって偉大に、物々しく思われるこうしたこともすべて、永遠のはればれしい大自然のなかにおける、あの一団の煙に等しいではないか？夕日の光に溶けていく煙の小塊と、何ら拵ぶところはないではないか？」(同前)と。

まさに、統御された心の鏡に映し出された、みすぼらしくも矮小な戦争の実像であります。「宇宙的ヒューマニズム」の巧まざる顕現であります。

私どもは仏法を基調にして、国連支援をはじめ、様々な平和・文化運動を推進しております。

それは、端的に、「人間革命を第一義に社会の変革へ」と標榜しておりますが、レオナルドにおける「自己を統御する意志」は、私どもの「人間革命」と深く通じていると私は信じております。

制度や環境など、人間の"外面"にのみ、目を向け続け、あげくの果ては民族紛争の噴出する惨憺たる結末を迎えている、世紀末の人類にとって、自己の"内面"をどう統御するかというところから出発するレオナルド的命題は、ますます重みを増してくるであろうと、私は確信しております。

### 「未完成の完成」を生きる

第二に、レオナルドにおける「間断なき飛翔」ということ

を申し上げておきたい。

人間が鳥のように大空を飛翔することは、あまりにも有名なレオナルドの夢でありましたが、彼の魂もまた、生涯を通して「間断なき飛翔」を繰り返しておりました。

「若いうちに努力せよ」(以下、『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』杉浦明平訳、岩波文庫)

「鉄が使用せずして錆び、水がくさりまたは寒中に凍るように、才能も用いずしてはそこなわれる」

「倦怠より死を」

「ありとあらゆる仕事もわたしを疲れさせようとはしない」等々の言葉は、この天才がまた希代の努力精励の人でもあったことを物語っております。

「最後の晩餐」の制作中など、日の出から夜遅くまで、飲まず食わずで仕事に没頭しているかと思うと、三日も四日も絵に手をつけずに、行きつ戻りつ思索にふけり続けることもあったという。

この、すさまじいばかりの集中力。にもかかわらず、こうした創作への執念とは裏腹に、レオナルドの創作で完成されたものは、周知のように、ごく少ない。

絵画においても、極端な寡作のうえ、そのほとんどが、未完成のままであります。

「万能の天才」らしく、そのほかにも彫刻、機械や、武器の製作、土木工事など、驚くべき多芸多才ぶりを発揮しておりますが、見果てぬ夢でしかなかった人力飛行に象徴されるように、おおむねアイデア倒れ、意図倒れに終わっているようであります。

特徴的なことは、レオナルドは、それに何ら痛痒は感じないらしく、未完を苦にするのでもなく、未練をもつ様子もなく、恬淡として、他へと念頭を転じてしまうのであります。

傍目には未完成に見えても、おそらく彼には、ある意味で完成しているのであり、いわば「未完成の完成」ともいふべき相乗作用であったにちがいない。そうでなければ、創作への執念と、おびただしい未完成との落差は、理解に苦しむといえましよう。

しかし「未完成の完成」は、同時に「完成の未完成」であった。

ルネサンスの時代精神は、「全体」「総合」「普遍」などと形容されますが、レオナルドにあっても、無限に広がり生成流動しゆく、宇宙生命ともいふべき全体性、普遍性の世界——かつてヤスパースが「一切がそれに奉仕せねばならぬ全体」と呼んだ包括的な世界が、まず予感されていたはずであります。

創作活動とは、絵画や彫刻であれ、工作機器や建築、土木の類であれ、そうした全体性、普遍性の世界を、巨腕を駆使しながら個性のなかに写し取ってくる創造の営みでありました。

すなわち、不可視の世界の可視化であった。従って、いかに完成度を誇る傑作であっても、個別の世界の出来事であるかぎり、未完成であることを免れえない。人はそこに安住してはならず、新たなる完成を目指して「間断なき飛翔」を運命づけられているのであります。

ブッダが最後に残したのも、「もろもろの事象は過ぎ去

るものである。怠ることなく修行を完成なさい」という言葉でありました。

大乘仏教の精髓も、「月月・日日につより給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」（「聖人御難事」御書1190頁）と、更にまた、「譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし」（「一生成仏抄」御書384頁）と、生命の本然的なあり方を示しております。

「未完成の完成」から「完成の未完成」へ——ゆえに両者の相乗作用とは、ダイナミックに生成流動しゆく生命の動き、現実の動きそのものといつてよい。

「経験の弟子レオナルド・ヴィンチ」（杉浦明平訳、前掲書）と宣言し、一切の先入観を排して現実の動きを凝視し続ける彼は、従って、現実を固定化してしまいがちな言語の働きには、不信と敵意すら抱いていた。

「絵画」を強調し、「言語」を難ずるレオナルドの特異な言語批判は、私に、大乘仏教・中興の論師である龍樹菩薩の洞察を想起させるのであります。

彼もまた、仏教の根本を成す「縁起の法」すなわち「空」に関して、「滅することもなく、生ずることもなく、断滅もせず、恒常でもなく、単一でもなく、複数でもなく、来ることもなく、去ることもない相互依存性（縁起）は、言語の虚構を超越し、至福なるものであるとブッダは説いた」と称えながら、現実の固定化、実体化に陥りがちな言語の虚構性を鋭くえぐり出しております。

言語による固定化が、完成と未完成のダイナミックな相乗作用を失わせ、かりそめの「安定」を恒久的なものとして錯覚させてしまうのであります。レオナルドも龍樹も、そうした「安定」は、易きにつこうとする怠惰な精神の格好の温床となるであろう、と警鐘を鳴らしているようであります。

「性急は愚かさの母である」（下村寅太郎『レオナルド・ダ・ヴィンチ』勁草書房）とのレオナルドのさりげない箴言も、こうした背景のもとで初めて、秀抜なる光彩を放ってくるのではないのでしょうか。

それはまた、言葉によって描き出されたユートピアの青写真を実体と錯覚し、そこへ向けて「性急」に走り続ける、急進主義の危険性をも照射しております。あらゆる政治的、社会的諸問題と同様、国連の活性化にあたっては、急進主義は禁物であります。

それは国連への「過信」であり、「過信」は、ちょっとしたつまづきで、容易に「不信」に転じてしまう。

その結果、「ゆあみの水と一緒に、子どもまで捨ててしまう」「愚かさ」を犯すことは、必定でありましょう。レオナルド的歩みの必須なるゆえんであります。

以上、「自己を統御する意志」「間断なき飛翔」の二点にしばり、仏教の知見とも関係づけながら、私なりにレオナルドの精神的遺産にアプローチを試みさせていただきました。

## 「民衆の声を生かす人類の議会」へ

かつて、ルネサンス研究の大家ブルクハルトは「偉人とはその人がいなければこの世界は何か欠けているように私達に思われる人々のことである」（『世界史的諸考察』

藤田健治訳、岩波文庫）と述べておりましたが、レオナルドは、まさにこのような偉人として、イタリア・ルネサンスに不滅の光芒を放っております。

と同時に、当時は「孤高の人」「独歩の人」であったレオナルド的なものが、世紀末のカオスの真ただ中にある今日ほど、求められる時期もないと思います。国連を軸にした、新たなグローバルな秩序の形成も、結局のところ、それを担うに足るコスモポリタンを、どれだけ輩出できるかに、かかっているからであります。

「われら連合国の人民は」という一節で始まる、あの国連憲章が象徴するように、民衆こそが主体であり、人間こそが根本であります。

ゆえに、世界市民の更なる力の結集によって、国連を、「民衆の声を生かす人類の議会」へと高めてまいりたいのであります。とともに、生きとし生けるものの証とは一体、何か。人間としての価値は一体、どこにあるのか。国と国、民族と民族の親善友好は、何がポイントか。

その地下水脈に、文化というものをみなぎらせ、また異文化を認めながら交流を深めていく、新しき人間主義の脈動が、必要となってきました。

これこそ、まさしく、貴大学の意義深き900年祭の折、我が創価大学も署名させていただいた、あの「大学憲章」で、高らかに宣言されている理念でありましょう。

私も仏法の立場から、レオナルドの遺産を継承しつつ、皆さま方とともに、その人類史の新たな夜明けに向けて、走り抜いていく決意であります。

終わりに、「学問の偉大なる母」たる貴大学のますますの栄光を祈りつつ、貴大学とゆかりの深い大詩人ダンテの『神曲』の一節を申し上げ、私の講演とさせていただきます。

「恐れるな」

「安心するがよい。

私たちはだいたい先まできたのだ、ひるまずに、あらゆる勇気をふるい起こすのだ」

（野上素一訳、『世界古典文学全集』35所収、筑摩書房）

ご清聴、ありがとうございました。グラッチェ。